

日点委通信

No.26

2010年11月 1 日発行

「東京盲啞学校発祥の地」記念碑の建立に併せて 「日本点字制定の地」記念碑完成

筑波大学附属視覚特別支援学校(盲学校)と同聴覚特別支援学校(聾学校)とが楽善会訓盲院として東京府京橋区(現・中央区)築地3丁目15番地に開校し、盲児・聾啞児の教育を開始したのは1880(明治13)年のことです。2010年の今年は創立130周年に当たります。訓盲院は1884年には訓盲啞院と改称し、翌1885年には文部省の直轄学校となり、1887(明治20)年に官立・東京盲啞学校になりました。この東京盲啞学校で1890(明治23)年にルイ・ブライユの考案になる点字が日本語に翻案されました。今年に翻案完成120周年の記念の年です。東京盲啞学校は1891年には小石川区(現・文京区)指ヶ谷町さしがやちように校舎を移し、1909(明治42)年に盲聾を分離して東京盲学校・東京聾啞学校となり、太平洋戦争後、東京教育大学・筑波大学の附属校として現在に至っています。

附属盲学校の同窓生や旧職員の間には、学校発祥の地に記念碑がほしいという根強い願いがありました。たまたま機会があつて、記念碑建立を強く願う有志4人が活動を開始し、附属聾学校に呼びかけ、創立130周年に当たる2010年竣工に向けての記念碑設置準備委員会を立ち上げ、2009年11月に記念碑建立実行委員会を結成しました。

記念碑の大きさは、底面90×60(単位cm)に高さ83の切妻型家屋の形で、石材はインド産のニューインペリアルレッド。横長の正面に横書きで2段に分け、上段は「東京盲啞学校発祥の地」、下段は「日本点字制定の地」と碑銘を刻み、傾斜している部分にブロンズ(71×36)を貼り碑文を記す。点字はこのブロンズに入る。記念碑のデザインから制作まで筑波大学芸術学群から多大な援助・支援があつて完成しました。

記念碑の設置場所は、東京都中央区築地4丁目の区立市場橋公園いちばぼしに隣接する児童公園内。市場橋公園は、東京盲啞学校の校舎正面の道路をはさんだ向かい側。

2010年11月1日、記念碑の除幕式と記念式典が挙行政されます。

日本点字委員会第46回総会報告

日本点字委員会は、2010年6月5日・6日の両日、横浜市都筑区の障害者研修保養センター「横浜あゆみ荘」において、日本点字委員会第46回総会を開催し次の事項を協議した。出席者は45名であった。

1. 委員・役員等の改選について

2010年は委員等の改選の年に当たり、盲教育界代表委員は全日本盲学校教育研究会から、盲人社会福祉界代表委員は日本盲人社会福祉施設協議会から、学識経験委員は第46回総会に先立って開催された両界代表委員協議会において、それぞれ次のとおり選出され、2014年までの4年間第11期委員としての任務に当たることになった。

盲教育界代表委員は、岩屋芳夫（横浜市立盲特別支援学校）、菊池理一郎（宮城県立視覚支援学校）、坂井仁美（愛知県立岡崎盲学校）、田中和子（大阪府立視覚支援学校）、原田早苗（筑波大学附属視覚特別支援学校）、松坂加代子（広島県立中央特別支援学校）、米島芳文（石川県立盲学校）、山田雄春（大阪市立視覚特別支援学校）の8名。

盲人社会福祉界代表委員は、植村信也（日本点字図書館）、加藤三保子（福島視覚情報サポートセンターにじ）、高橋恵子（視覚障害者総合支援センターちば）、高橋秀治（ロゴス点字図書館）、福井哲也（日本ライトハウス点字情報技術センター）、藤森昭（東京ヘレン・ケラー協会点字出版社）、水谷吉文（天理教点字文庫）、渡辺昭一（京都ライトハウス情報製作センター）の8名。

学識経験委員は、加藤俊和、金子昭、木塚泰弘、小林一弘、笹川吉彦（日本盲人会連合）、田中省三（全国盲学校長会）、田中徹二、当山啓、藤野克己、宮村健二、渡辺勇喜三の11名。

今回の総会において、これらの委員の互選により、会長には木塚泰弘、副会長には小林一弘と田中徹二が、事務局長には当山啓が、会計監査には塩谷治と高橋秀治がそれぞれ再任された。事務局員には、奥野真里、白井康晴、畑中真弓、畑中優二の4名が会長から委嘱され承認された。

2. 『日本点字表記法』における表記符号の用法について（継続課題）

(1) 第2カギの用法の見直し ― 会話や引用に用いるカギは、第1カギ・第2カギ対等とする現行規定を、原則として第1カギとする近点研の修正提案について意見交換、継続課題とする。

(2) 本来ひと続きに書き表すべき箇所での行移しの許容について ― 大筋で合意、

取り扱いについて継続検討課題とする。

(3) 見出しがページをまたぐことの原則禁止 — 「原則として」の文言を入れることで意見の一致をみた。

3. 『日本点字表記法』における書き方の形式について（継続課題）

福井哲也委員から、目次の見出しとページ数とをつなぐ点を②の点または⑤の点とする修正提案があり、各地域での検討課題とした。

4. 医学用語点字表記専門委員会中間報告

2007年6月の委員会発足後13回の検討を重ねた結果の報告、「医学用語の切れ続きの指針」について宮村健二委員から、「数字を含む経穴等の点字表記」について岩屋芳夫委員から、「同音異穴の点字表記」については宮村健二委員から、「漢方薬などの名称の切れ続き」については渡辺勇喜三委員からそれぞれ検討結果の詳細報告があった。以上の中間報告を日本理療科教員連盟はじめ点字図書出版界に公開し、2010年12月まで意見聴取、2011年の総会に向けて最終報告をまとめる予定。

5. 総会で合意された表記法の小改訂事項の実施に関する提案 — 当面「漢字や仮名で書き表された単位の切れ続き」について（近畿点字研究会）

福井哲也委員から標記の提案があり、総会で合意された点字表記法の小改訂事項を広報するためのホームページ開設に向けて準備を進めることとした。また、「漢字や仮名で書き表された単位の切れ続き」については「日本の点字」第35号に掲載するほか、リーフレットを作成し普及に努めることとした。

6. 日本の点字制定120周年記念出版について

田中徹二副会長と当山啓事務局長から、マイケル・メラ著の『ルイ・ブライユ — 天才の手法』を翻訳して、点字制定120周年記念出版とすることが提案され承認された。翻訳権は取得済み。翻訳者2名予定。文体の調整・統一は金子昭委員。

7. 世界点字協議会（WBC）への協力について（田中徹二）

2011年9月26日～10月2日、ドイツのライプツヒ大学で「21世紀における点字」（点字21）をテーマに国際会議が開催される。開催に当たり費用分担の協力依頼があり受け入れることとした。また「点字21」に日本からはアクセシブルデザインに点字をどう反映させるかについて発表するに当たり、高橋玲子たかはしれいこさんに協力を依頼する。

8. 「日本の点字」第35号の編集について（小林一弘）

『日本点字表記法』のあり方についての特集を組む。巻頭は、これまで『日本点字表記法』をまとめてきた木塚泰弘会長に「表記法」の編集方針等についての解説を依頼し、数人の委員に「表記法」のあり方についての寄稿を依頼する。また、広く点字関係者からの投稿を公募する。